

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32309

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13224

研究課題名(和文) 一側性難聴による障害実態の解明とエビデンスに基づいた支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Elucidation of the actual condition of disability caused by unilateral hearing loss and development of evidence-based support programs

研究代表者

岡野 由実 (Okano, Yumi)

群馬パース大学・リハビリテーション学部・講師

研究者番号：60785393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：一側性難聴による聞こえの障害の実態について、一側性難聴当事者の叙述および評価尺度による数値データの両側面から解明し、エビデンスに基づき一側性難聴児とその家族に対する支援・助言の指針を得ることを目的とした。一側性難聴者はコミュニケーション場面の制約を受けており、聴取困難場面では意識を集中させる、聞こえたふりをするといった対応行動をとっているため、かえって困難感が増す傾向が示された。聞こえの障害場面は、発達とともに具体化し、特に社会人以降に顕在化する傾向があった。成人期の障害場面に対処するため、発達過程において効果的な対応行動を形成する助言・指導の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一側性難聴について、近年、新生児期に診断が可能となり、一側性難聴児とその家族に対し、新生児期から長期的な見通しを持った支援や助言の必要性が生じてきた。本研究では、一側性難聴者の抱える障害の実態について、当事者の叙述を得て、障害場面における対応行動と発達の変容の観点から明らかにした。対応行動形成に向けたリハビリテーション指導の方針と発達段階に基づく家族や当事者への助言・支援の方針を得ることができ、臨床的に有用な情報を提唱できたと考える。

研究成果の概要(英文)：The hearing handicap of unilateral hearing loss (UHL) was analyzed from the narratives and questionnaires of UHL patients. The purpose of the study was to obtain evidence-based guidelines for support and advice for UHL patients and their families. UHL patients have communication restrictions and use coping strategies such as focused awareness and pretending to hear. The use of incompatible strategies increased the restrictions. The situation became more specific with increasing age, and the difficulties became more pronounced after working adults. It is important to advise effective coping strategies and provide developmentally appropriate information.

研究分野：言語聴覚療法学

キーワード：一側性難聴 聞こえの障害 対応行動 発達の变容 リハビリテーション支援

1. 研究開始当初の背景

ヒトは両耳を有し、両耳からの情報処理を前提としており、片側耳に難聴がある場合には、片耳で固有な処理が行われる。このような片側耳が正常で、対側耳に難聴のある状態を一側性難聴 (UHL; unilateral hearing loss) という。一側性難聴者の聞こえの障害について、Harfordら (1965) は、主に 1) 難聴側からの聴取困難、2) 騒音下での聴取困難、3) 音源定位の困難に集約されると報告している。とくに騒音下や難聴耳側の音源など限られた聴取場面で困難な状況が生じ (Colletti 1988) 通常の静寂下や良聴耳側の音源に関する聴取には問題は生じないという特徴があるとされている。

一側性難聴について、近年、新生児期に診断が可能となり、一側性難聴児とその家族に対し、新生児期から長期的な見通しを持った支援や助言の必要性が生じてきた。しかし、一側性難聴当事者がどのような障害を抱えているのか実態は不明な点が多いといえる。そこで、一側性難聴による障害の実態と、特に心理面の課題、発達的変容についての研究的知見を集積し、耳鼻咽喉科臨床および難聴児療育臨床において、エビデンスに基づいた支援・助言指針を提言する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、一側性難聴による聞こえの障害の実態について、一側性難聴当事者の叙述および評価尺度による数値データの両側面から解明し、エビデンスに基づき一側性難聴児者とその家族に対する支援・助言の指針を得ることを目的とする。

本研究は第 1 研究と第 2 研究から成り、各研究の目的は以下の通りである。

(1) 第 1 研究:

一側性難聴当事者の障害の実態について、活動 / 参加の制約の観点からその実態を示し、さらに聴取困難軽減のための対応行動の形成と活動 / 参加の制限との関連を明らかにする。

(2) 第 2 研究:

一側性難聴当事者の障害状況の叙述を得て、生涯発達段階における聞こえの障害状況の変容を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 第 1 研究:

機縁法によりリクルートした 6 名の一側性難聴当事者 (男性 4 名、女性 2 名; 平均年齢 26.3 ± 6.4 歳) に、一側性難聴により経験したエピソードについて自由に叙述を求めた。対象者より得られた記述データを内容ごとに切片化し、類似した内容によりカテゴリー化を行い、得られたカテゴリーの内容を質問文に変換して 35 項目の暫定版質問紙を作成した。暫定版質問紙について、10 名のエキスパートレビューを行い、臨床的視点から一側性難聴者の障害実態を示す項目として妥当と評価された 25 項目で質問紙を構成した。

作成された質問紙について、ソーシャルネットワークサービス (SNS) 内の一側性難聴者のコミュニティ登録者 (調査実施時 366 名登録) を対象として Web 調査を実施した。

対象者には、個人属性 (年齢、性別、発症時期、難聴側、難聴以外の耳症状) と、作成した質問紙については 5 段階評価 (5: とてもあてはまる、4: あてはまる、3: どちらともいえない、2: あまりあてはまらない、1: 全くあてはまらない) で回答を求めた。

(2) 第 2 研究:

就学までに難聴の診断を受け、一側耳に高度以上の難聴がある一側性難聴成人 12 名 (20 ~ 30 歳代) を対象として、個別に半構造化面接を実施した (40 ~ 90 分程度)。面接の内容は、基礎的情報 (難聴発見経緯、通院歴、医師からの説明) を把握した上で、診断から現在に至るまでの聞こえの障害状況と対応方法、その時の受け止めや周囲の反応について、インタビューガイドに従って質問し、自由に叙述を求めた。面接時の音声は IC レコーダにて録音した。録音データより逐語録を作成し、内容を質的に分析した。方法は、叙述を最小の意味単位に切片化しタイトルを付し、内容的に類似したものでカテゴリー化を行った。「聞こえの障害場面」に関するものを抽出し、エピソードの語られた年代により表に布置した。

4. 研究成果

(1) 第 1 研究:

一側性難聴当事者の活動 / 参加の制限

一側性難聴者の 90% 以上が「5: とてもあてはまる」または「4: あてはまる」とした項目について、「食事や会議での座席の位置を心配している」(94.8%)、「会話の相手に不快感を与えているのではないかと心配している」(91.1%)、「呼ばれている場所が判別できず対応が遅れる」(90.4%) と、コミュニケーション場面において、位置の確保や相手への不快感、対応の遅れを懸念している実態が明らかとなった。「聞こえないことで会話への参加をししばしば諦める」と回

答した対象者は79.3%と多く、会話参加への制約があることが示された。一方で、「難聴のために仕事や趣味などを諦めたことがある」では43.7%と半数以下にとどまり、社会活動そのものへの制約は低いことが示された。

個人属性による要因について、本研究では、性別、年齢、発症時期において有意な傾向は認められなかった。一方で、耳鳴りやめまいといった耳症状を合併する対象者では、活動/参加への制約を強く感じている傾向が示された。難聴以外の耳症状が、一側性難聴者の困難感を増す要因となることを念頭に入れ、慎重な対応が求められると考えられる。

一側性難聴者における対応行動の実態と活動/参加の制限との関連

一側性難聴者における聴取困難場面での対応行動について、「聞き取れないときは、何度も聞き返す」(92.6%)、「聞き取れないときには、聞こえたふりをする」(91.9%)、「意識を集中させて聞く」(85.9%)が多い結果であった。

さらに、「周囲に難聴のことを伝える」は75.6%と半数以上が行っている一方、「多くの人が私に難聴があることを忘れてしまう」が71.1%と同程度であり、「私が難聴への理解を求めても、あまり理解されない」が49.6%と約半数が周囲の理解不足を感じていた。そのため、「座る場所や話す場所を配慮してもらおう」と周囲からの配慮を受けている人は57.8%と約半数程度にとどまった。

つまり、半数以上の一側性難聴者が周囲に難聴のことを伝えて配慮を依頼しているものの、難聴に関する理解が得られないことへの困難感について指摘された。一側性難聴は外見からは難聴があることを判別することが難しく、常に聴取困難になるのではなく特定の音響場面でのみ聴取困難となることから、周囲へ配慮を依頼しても理解が得られにくいことが推測された。

活動/参加の制限との関連では、意識を集中させる、聞こえたふりをするといった対応行動では、活動/参加の制約が高い傾向を示した。特に相手へ不快感を与えているのではないかと懸念や会話への参加を諦める項目と高い相関があった。周囲への気遣いから聞き返すことで相手に不快感を与えるのではないかと懸念し、聞こえたふりをしたり意識を集中して自助努力をしたりすることにおいて、コミュニケーションの不全感を感じ、会話参加そのものを諦めるといった悪循環が生じている状況が推察された。一側性難聴者に対し、コミュニケーションブレイクダウンを効率的に改善するための対応行動形成に関するリハビリテーション指導の必要性が示唆された。

(2)第2研究：

聞こえの障害場面の実態

難聴側聴取、騒音下聴取、音源定位といった3種の聴取場面(Harfordら, 1967)に、社会的障害、会話場面、学業場面、社会的障害といった生活の場面と困難なしを加え、7種のカテゴリーが生成された。7種のカテゴリーのうち、騒音下聴取に関する概念が最も多く得られた。

難聴側聴取に関しては、良聴耳側で聴取可能な場所に移動することができれば解消される場面もあると言え、音源定位に関しては、聴覚情報のみでは音源が定位できなくても、視覚情報から音源の場所を探したり、生活経験から音の種類によって場所の予測をつけたりするなど、音源定位を必要とする場面は限られていることが推測される。しかし、騒音下聴取では、場所を移動するなどの対応行動を取っても聴取困難さは解消されないため、騒音下聴取場面において最も困難感が高い傾向を示す可能性が考えられる。

さらに、就職活動での失敗や職業選択の制限により、社会的障害を認識する例もいることが示唆された。「対人場面」や「職務場面」、「職業上の障害」において叙述が多い傾向を示し、学生生活における困難場面に比べ、社会人以降の職務遂行上の困難場面に直面する頻度が高いことが示唆された。

聞こえの障害場面に関する発達的変容

対象者がエピソードを叙述した時期に注目して、聞こえの障害場面に関する発達的変容を検討した。年代が上がるにつれ、聴取困難場面が具体化かつ不可避的となる傾向を示した。小学生では、漠然とした困難感から、中学生以降では場面が具体化し、大学生以降で社会的コミュニケーション場面が増加して困難感が増し、社会人以降、飲み会での会話や電話中の声掛け、上座・下座といった座席を選べない場面など、社会的に多様な場面において聴取困難な状況が複雑化していく傾向が示された。対象者からは、「社会が広がっていくと、不便があるなっていく認識が増えていった」といった叙述が得られ、一側性難聴者の聴取困難場面は、特に社会人以降に、情報の高次化に伴い、聴取場面が複雑化し、問題が顕在化する可能性が示唆された。

(3)一側性難聴児とその家族に対する支援・助言の指針

一側性難聴による聞こえの障害については、発達とともに障害場面が具体化し、特に社会人以降に情報の高次化と社会参加の拡大により、量的にも質的にも聞こえの障害場面が顕在化する傾向があることが示唆された。成人期の聞こえの障害に対処していくために、それまでの発達過程において、自身の難聴に対する考察を深め、聴取困難となる場面を自覚し、困難感を軽減するための対応行動を形成しておく必要があると考えられた。

<引用文献>

Harford E. , Barry J. (1967) A rehabilitative approach to the problem of unilateral hearing impairment: the contralateral routing of signals(CROS) . Journal of Speech and Hearing Disorder , 30(2) , 121-138 .

Colletti V. , Fiorino F. G. , Carner M. et al (1988) Investigation of the long-term effects of unilateral hearing loss in adults . Br.J.Audiol. , 22(2) , 113-118 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岡野 由実	4. 巻 39
2. 論文標題 一側性難聴児支援と家族への助言：診断期から青年期を展望して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児耳鼻咽喉科	6. 最初と最後の頁 270～274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11374/shonijibi.39.270	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡野由実, 廣田栄子
2. 発表標題 一側性難聴者における障害の認識と対応行動による類型化と特徴
3. 学会等名 第63回日本聴覚医学会総会・学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡野由実
2. 発表標題 一側性難聴児の家族への助言：学童期から青年期を展望して
3. 学会等名 第13回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡野由実, 廣田栄子
2. 発表標題 一側性難聴による障害認識の発達変容に関する検討
3. 学会等名 第44回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡野由実, 廣田栄子
2. 発表標題 一側性難聴による心理的負担の構成に関する検討
3. 学会等名 第19回日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小笠原貴仁, 岡野由実
2. 発表標題 一側性難聴児童1例への障害認識に対する支援：健聴児童へのアンケートを通して
3. 学会等名 第19回日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

片耳難聴のすべて https://kikoiro.com/category/all-about-uhl/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------